
とある少年の現実殺戮（リアルキリング）

砥石坂砌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルキリング
とある少年の現実殺戮

【Nコード】

N0888U

【作者名】

砥石坂砌

【あらすじ】

学園都市。超能力者の育成に力を注ぐ、科学都市。
そんな現実を満たした世界で、一人の少年がつぶやく。

「ならばその現実、僕が殺戮しよう」

注：ほぼオリジナルです。おなじみのあの人たちはあんまり出ないかも知れませんが、その辺をご了承ください。

現実くReal

学園都市の、どこにでもあるような路地裏。

僕の目の前で、いかにも不良生徒くな感じの男子達が一人の女の子に絡んでいる。

男子達の力は強く、しかも能力持ち。少女は脅されているのだ。

無能力者が敵うわけない。

少女は現実には絶望していた。

なぜ何もしていない自分がこんな目に遭うのか。

なぜこんな時にアンチスキルは駆けつけてくれないのか。

なぜ自分にはヒーローがいないのか。

なぜ、なぜ、なぜ。

そんな言葉が頭の中を駆け巡る。

そしてその一言を、見つけ出す。

現実には、理不尽だ。

「その一言を待っていたよ」

僕の言葉に、不良と女の子が一齐にこちらを見る。

「その少女さん。君は今、ひどく傷ついている。

容赦なく突然に襲い来る非日常に、君は悲しんでいる。

君はこの、不幸な現実を恨んでいる。

じゃあ、君はどうしたい？その男子生徒諸君を、どうしたい？

この世界を、どうしたい？

今だけは、君の一言が、この醜く残酷な世界を動かす引き金だ。^{トリガー}

さあ、どうする？」

少女は困惑している。不良達も困惑している。

頭のおかしい奴が現れやがった。

ああ、僕はおかしい。

いきなり現れて訳のわからない事を講釈する奴なんて、僕だって驚く。

だが、僕はおかしくなければならない。

僕は決めたのだ。

この現実を、反逆してやる。

少女は唇を震わせ、幾度と躊躇しながら。

やっとその引き金に指トリガーをかける。

「・・・・・・・・わっ、私は・・・・・・・・」

「正直に言つといい。君はこの現実をどう思つっ」
自分にやさしくない現実を。

「こんな現実・・・・・・・・嫌だ」

「オーケー、引き金は引かれた」

僕は大仰に両手を広げる。

僕は目をつぶる。

僕は口にする。

「ならばその現実、僕が殺戮しよう」

世界くNetworkく

「ただいま」

「あ、お帰り、くろくん」

「今日は何してるの？」

「えっと、チャット。色んな人とお話してる」

「そう。面白そうだね」

「面白いよ。もう友達もできたし」

「へえ、それはなかなか」

「くろくんもやってみる？」

「いや、僕はいい。会話ってほら、僕苦手だし」

「会話と僕は反対じゃない？」

「いや、僕はいい。僕ってほら、会話苦手だし。あ、ホントだ」

「日本人なんだから、日本語は正しく使わないと」

「意味は通じるからいいと思うんだけどなあ」

話の切れ目、やっとモノローグを挟む事ができた。

やれやれ。

学園都市の一高校、『千堂坂学園』。

その寮に僕達は住んでいる。

とは言え、僕は通っていないのだが。

つまりこの部屋の主は僕ではない。

現在僕に擦り寄って、その胸をぐいぐい押し当ててくる少女。

たかなりなみだ
高鳴泪。通称泪ちゃん。

甘く美しい容姿、甘く蕩けそうな声の持ち主。

ばいんばいんできゅっとしててぎゅーっとするのにちょうどいいサイズ。

これは果たして人間なのか、と、初めて見た時には驚いた。

ぶっちゃけてしまうと、泪ちゃんは学校には通っていない。

不登校の問題生徒なのだ。

一日中、一年中部屋にあるパソコンの前にいる。

ネットサーフィン、いや、ネットダイビングと言っても過言ではない。

従って、放っておくとご飯も食べないし、お風呂にも入らないのでそこが問題なのだ。

・・・・・・え？違う？

そしてもう一言聞こえた。言わせてもらっ、断固糾弾させてもらっ。

誰がヒモだ！！！！

確かに僕は泪ちゃんの家に住んでるしたまにしか働いてないけど！

それだけは許せん！認めてなるものか！

遭遇（Encounter）

朝。具体的にはAM5時きっちり。

なんだか身動きが取れない、なんでもいい匂いがする、なんだか柔
らかい。

と思っていたら、案の定過ぎるくらい泪ちゃんが僕を抱き枕にして
いた。

泪ちゃんベッドで寝たはずなのに。

僕はいつも通り謎の技術で完璧かつ天国のロックを外す。

自分でもどうやっているか、いまいちわかっていないのだ。

静かゝに、ベランダに出る。

「・・・・・・・・ふむ」

空は曇り気味。ニユースでは昼から晴れるとの事。

「・・・・・・・・科学の進歩だよなあ」

再び静かゝに、中に入る。

まずは着替え。

僕はいつも黒いロングコートを着ている。

これによってセンスのなさを隠しているのは秘密だ。

ただ、たまに警備員に職務質問アンチスキルされるが、そこはそれ、どうにか切り抜けて。

僕はこの学園都市で活動している。

ここには現実があふれている。

科学とは現実を証明するものだ。したがって、僕の目的に最適な場所である。

ただ、少し気になるのは、最近学園都市外の人間が出入りしていると言うことだ。

清教などに動かれては困る。

だから最近の活動はもっぱら見回りだ。

着替えを終え、僕はまた静かくに外に出る。

行動一つ一つが命取りになりかねないので仕方がない。

僕はまだ人通りのほぼない道を歩く。

と。

僕はとっさにしゃがんだ。いや、しゃがんだなんてものじゃない。

とっさに転んだ、というのが正しいだろう。

だがそのおかげで、僕は一つ命を拾った。

泪ちゃんの部屋から出ておおよそ十分後の事だった。

吸血鬼 V a m p i r e

『人の大きさ、形をした何か』が、転んだ僕の上を飛び越えていく。

その位置は、僕の首があつた高さ。

刈り取られる、所だつた。

「・・・・・・・・うゃ？」

『それ』は僕の方を振り向く。

黒に金のラインが入った上下のジャージ。

頭のとっぺんにアホ毛が二本、触角のように揺れている。

そして、顔。

だらしなく開いた口、そして、目隠し。

・・・・・・・・これってもしかして、『触るな危険』ってやつ？

「・・・・・・・・ああ、ごめんね、つい、うっかり」

少し間延びした口調で、『それ』はしゃべる。

「・・・・・・・・いい、匂いが、した、からさあ」

「・・・・・・・・つい、ね？」

にへら、と笑う。

その際口の端に覗く、犬歯。

鋭く尖っていた。

「…………アタシはねえ、吸血鬼。わかるう？」

人生初、吸血鬼との出会いだった。

しかし、僕はこんな現実ごめんだ。

そもそもなんでこんなところに吸血鬼がいるんだ？

ここは現実の溢れる都市、なんて言っただばかりなのに。

「…………聞いてるう？」

「…………聞いてますよ」

「…………ねえねえ」

「嫌です」

「いきなり、断らないで、よう。まだ、何も言ってない、のにい」

「血を吸わせろ、でしょう」

「あや、正解」

正解なのかよ。これでいいのか吸血鬼。

疑問 Question

「・・・・・・・・・・あー、ごめん」

突然吸血鬼一（？）がふらつき、頭を押さえる。

「ホントに、おなか、減った・・・・・・・・君、ちょっとでいいから」

「知ってますか、つまみ食いは止まらなくなるんですよ」

「ええ、ホント？それは、困るなあ。最近、せっかく、ダイエット、したのに」

そういう問題じゃない。

どうにかコミュニケーションが取れる相手らしい事はわかった。

なら次はどうする？

冥土返しを紹介するわけにはいかない。あの人精神科じゃないし。

ただ、もし本当に吸血鬼だと言うのなら。

「あなたは何でこんな早朝に出歩いてるんですか」

帰り道にしても遅すぎる。いくらここに日が当たってないとは言え、既に日は昇っている。

「あー、と。アタシはねえ、すごいんだよ？」

「何がですか？」

「日中でも、出歩けるんだあ」

「吸血鬼、じゃなかったんですか？」

「吸血鬼、だけど、弱点、ほぼゼロ、みたいな？」

「そんなのアリか」

つい地でツツコんでしまった。

いや、仕方ない、自称吸血鬼が悪いのだ、僕のキャラが定まらないのもきつとこの人のせいだ。

「いやあ、それは、アタシの責任じゃないなあ」

結局何者なのだこの人は。

そしてさっきからじりじりと距離を詰めて来るな。

じりじり、じりじり、と僕達は歩く。

そして、彼女がにたと笑った瞬間。

彼女の背後に十字架が現れた。

狩獵（Hunting）

「目標捕捉、と言いますか、何と言いますか」

それは十字架としか言えない物体にして、十字架と呼んでいいのか迷うような代物だった。

その大きさである。

高さ2メートルはあろうかという巨大な十字架。

分厚く、棺桶にも見えるそれ。

それを男が背負っていた。

困ったような笑顔を浮かべ、眼鏡をかけた至極普通の好青年。

「困りますよイズルさん。いや、イズルさんと言つべきかコーネルさんと言つべきか」

青年はつかつかと自称吸血鬼に歩み寄る。

半端ではない重さを持つ十字架を背負ったまま、普通に歩いている。

今日はどうも現実味に欠ける日だ。

よいしょっと。そう言って青年は十字架を地面に置く。

「吸血貴族イズル・コーネル。大人しく、もう一度死んでください
ヴァンパイア

よ」

次の瞬間。

『がばあっ』と十字架が『口を開けた』。

中には、凶悪なほどの夥しい刃。

改めて確信する。あれは十字架なんて物ではない。

あれは巨大な拷問器具なのだ。

さしずめアイアンメイデンと言ったところか。

イズル・コーネルと呼ばれた自称吸血鬼が、ぐいん、と見えない何かに引き寄せられるように十字架に吸い込まれる。

『ばくん』と、十字架は口を閉じる。

「『ロザリオベイン苦痛十字』。一度はあなたもこの棺桶ベツトで

眠ってくれたじゃないですか。何で起きたんですか？材質が悪かったのです？

やっぱり普通の銀じゃダメですか、そうですね、というわけで

今回はちゃんと手順を踏んで練成した聖炎で鍛えた文句なしの聖銀です。

これでどうでしょう？ 苦労しましたよホント」

今気がついた。この青年は『笑っていない』。

ニコニコと。

ニコニコニコニコと。

ニコニコニコニコニコニコと。

青年は気持ち悪いほどの『笑顔』だったただけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0888u/>

とある少年の現実殺戮（リアルキリング）

2011年10月7日20時32分発行